

岐阜大学着任に際しての抱負

化学・生命工学科物質化学コース 荻原 陽平

2024年（令和6年）4月1日付で、岐阜大学工学部・准教授に着任した。慶應義塾大学「理工学部」、東京理科大学「理工学部」、東京都立大学「理学部」、と（転々と）所属を変えてきた人生の中で、初めての「工学部」である。

この異動に伴う“初めて”は学部だけではない。横浜で生まれ、そのまま首都圏の教育研究機関に所属してきた“シティーボーイ”の私と、そのさらに上をいく超都会っ子の妻（千代田区生まれ文京区育ち！）にとって、初めての“関東平野の外”での人生となる。早速、喫茶店の多さや（良い点）、運転マナー（悪い点）といった環境の違いを実感することになった。唯一、生後5ヶ月の娘だけは、適応能力が衰えた両親と違ってほぼアジャストを完了しており、おそらく一歳にもなれば、純ネイティブな岐阜の子に仕上がっているであろう。

研究環境における“初めて”といえば、何よりPI (Principal Investigator) として自分の研究室を持たせていただいたことである。研究の自由を享受できる分、責任はすべて自分で取らなければならない。研究室立ち上げに係る仕事（各種申請&登録、経理、装置購入&セットアップ、物品管理&廃棄、などなど）はすべて一人でやらないといけないし、それを言い訳に研究と学生への教育エフォートを下げることはあり得ない。“謎の新研究室”に飛び込んでくれた新4年生2名の期待を裏切る訳にはいかないからである。まだ着任して1ヶ月も経っていないが、ここまで多様なマルチタスク

を同時並行するのは初めてである。結構疲れた。

さて、私の専門は「有機合成化学」「有機金属化学」という、有機化学に分類される実験系の学問である。中でも、ある分子を異なる分子へと変換する「分子変換」の新概念・新規方法論の創出と理解を研究テーマの主軸としている。説明が抽象的なのは、“何でもアリ”だからである。学術的に新しければ（面白ければ）「どんな分子」でもいいし、「どんな反応」でも構わないが、結果的に社会に役立つような研究に展開できることもある。例えば、バイオマスから医薬品を合成したこともあるし、ペットボトルを半導体原料に変換する技術も開発した。まだ岐阜大学で独自研究は開始できていないが、ここから未踏領域の開拓に挑む。

最後に、独立的に研究する機会を下さった、本学関係者の皆様に心より感謝を申し上げたい。今後、荻原研究室から「画期的な研究成果」と「卓越した人材」を輩出することで、このご恩をお返ししたい。いや、必ずお返しします。



研究室最初の集合写真（左が著者）